

息子を遊学させること ― 昭和初頭の恐慌期、長崎から東京へ ―

――二〇二一年度宮崎聖平氏寄贈陣内宜男関係資料から――

解題

大門 泰子

はじめに

二〇二一年度、宮崎聖平氏より早稲田大学関係者の資料二三二点の寄贈を受けた。そのうち二二七点が本学教育学部教員であった陣内宜男氏（以下、敬称略）^{じんのうちよしお}に関係する書簡（ハガキも含む）や原稿の下書きなどであった。これらはすべて古書店で購入したとのことであった。

寄贈資料の内訳は、父陣内多三氏（以下、敬称略）から息子の陣内宜男に宛てた書簡が一八〇通、陣内から妻に宛てた書簡が四〇通、その他の書簡が一一通^①、陣内執筆の原稿などの下書きの束が一点である。父多三から陣内に宛てた書簡は、陣内が早稲田大学第二高等学院の入学試験を終えたばかりの一九二六（大正一五）年三月二十七日に始まり、二度目の兵役に着いた一九四一（昭和一六）年夏までの一六年間の長期に及ぶものである。第二高等学院入学から大

学学部卒業までの五年間の書簡は七八通ある。後年、陣内が妻にあてた書簡に「父の手紙は全部取つてある。亡き彼の思い出にするためだ。僕は父思いである」⁽²⁾という記述があることから、陣内は父からの書簡を意識的に大切にまとめて保管していたことは間違いない。

陣内の在学時（一九二六年四月～一九三一年三月）は金融恐慌・昭和恐慌による経済的不況の最中にあたり、「大学はでたけれど」と言われた時代の中で卒業を迎えた。この時期の大学生の生活の逼迫状況は、『早稲田大学百年史 第三卷』に記されている。そこには、『早稲田大学学報』に掲載された「本大学学生生計調査」や『早稲田大学新聞』に掲載された記事を通して、下宿から通う平均的な学生の必要経費（室料や食費、交際費）が一流企業の新入社員なみの金額になっていたりことや学生生活の都市化・享樂化が学費増大に拍車をかけていたことが紹介されている。一方、その仕送りをする側の状況については、不況により名目賃金以上に小売物価が低下したため、職を持つ父兄への影響は少なかつたであろうが「小売商や農業従事者の場合には、その困難は確実に増した」と記されているにとどまり、具体的な記述はない⁽³⁾。日記や家計簿のような資料がないかぎり、そうした数字は表にでにくいであろう。

本稿で紹介する書簡には、遠く長崎の地から早稲田大学へ息子を遊学させた一人の父親の仕送りの記録が克明に記されている。父は仕送りの都度、書簡に金額を明記していた。折々に家計の厳しさ、やり繰りの困難も伝えながら仕送りをやり終え、卒業を目前とした日の書簡には「愈待ちに待ちたる卒業を向へ嬉しく喜び合居り候 五年間毎日新聞を隈なく見早稲田校に事件は起ぬかと心配致只無事に卒業期を一日千週と待居たるに卒業を遂げ数千金の学資を意義あらしめ大学出身としての子を持つ親の心は感慨無量」と記していた。

陣内宜男とその父

陣内宜男は一九〇六（明治三九）年六月、長崎県諫早町（現、諫早市）に生まれた。陣内家の長男である。長崎県立大村中学校を卒業後、一九二六年四月に早稲田大学第二高等学院入学、早稲田大学文学部国文学専攻を一九三二年三月に卒業した。卒業後、半年余り中国で学んだ後に兵役に着き、退役後の一九三三年二月に早稲田大学学生課に就職し、四一年からは第二高等学院専任講師、高等師範部講師などを経て一九四九年四月早稲田大学（新制）教育部の助教となった。一九七二年三月、定年退職した。⁽¹⁾ 学生時代より文学部国文学科の窪田空穂教授に師事し、⁽²⁾ 学生課に就職した頃は「国文学会」の創立と会誌『国文学研究』の発刊にエネルギーを注いだ。一九三七年八月から終戦まで三回応召され、「ほとんど従軍に明け暮れた三十代であった」と語るほど陸軍での生活も経験している。⁽³⁾ 長崎県諫早町に住む父は、資料から推察できる限りで、陣内の在学時は、地主としての収入のほか、貸家業、共同購買会や蘭販利用組合の仕事、諫早町災害復旧耕地整理組合での期限付きの囑託から現金収入を得ていた。一九二七年五月には地区より町議会議員に推され、町議を務めている。ただし、地主とはいっても決して大地主ではないことは文面から察することができる。筆まめな父は手紙に送金額にくわえて、家族の話題や家の財政状況、地元風景や経済などを記して知らせた。新聞をよく読んでいて、情報を得ている。陣内の健康を気遣い、しっかりと勉強してほしいと毎回のように諭す。健康に対する思いは強く、陣内の持病である皮膚疾患のことや風邪、歯痛への心配もする。「何事も健康」が繰り返された。

陣内には二人の弟のほか姉や妹もいた。一九一八年に実母が没し、翌年に父が再婚したため、実家には継母と年

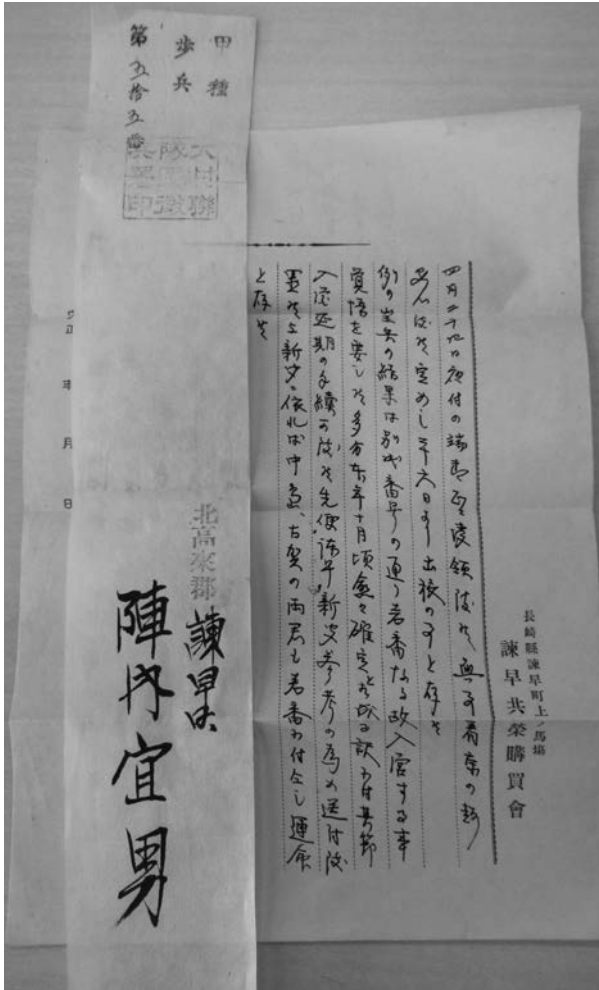
の離れた妹と弟もいた。継母は、毎日購売会の集金をして父を助け、陣内のためにセーターなども編んでいた。父は「母へ孝行は即ち父へ孝行 継母へツカヘルモ是レハ御前たち運命」と諭す。父の文面には「長男」や「家」意識を強いるような言葉はない代わりに、弟たちの進路や生活に関する相談や依頼、姉妹の縁談話や父の仕事や家政に関する様々な事柄への意見を求めている。父にとって陣内は常に頼りになる息子であり、よき相談相手であったと思われる。卒業後の就職も陣内の意志にしたがうとし、長崎にもどることも望んでいない。ただ一点、「卒業後の方進に付ては随意なるも弟妹ある家庭なれば自給自足と覚悟か」というように、自立していくことだけは求めている。

徴兵猶予

陣内は一九二六年四月、二〇歳になる年に六倍の入学試験倍率を突破して第二高等学院（二年制）へ入学した。「試験の結果は一生懸命勉強しても入学の出来ぬのは是れ運命 又人の富賤も同様一生の運命 それで入学の出来ぬからとて、くやむにも、及はぬ」といつていた父がまず心配したことは、二〇歳を迎える陣内の「徴兵検査」であった。当時、徴兵義務年齢は二〇歳。中等学校以上の卒業生には志願により現役在営期間を三年から一年に短縮する一年志願兵の制度があった。長崎県立大村中学校を卒業している陣内はこれに該当する。合格発表の前から「東京に行くならば徴兵検査には是非間に合うように帰宅する事」と記している。

合格発表後、父の勧めにしたがって、直ちに帰省して徴兵検査を受けたと思われる。五月一日の書簡には、

例の徴兵の結果は別紙番号の通り若番なる故入営する事覚悟を要し候 多分本年十月頃愈々確定と相成る訳に付其節入営延期の手續可致候 先便諫早新聞参考の爲め送付致置候



徴兵検査の結果を知らせる書簡（大正15年5月1日）

と、記されている。以下、入官延期手続きの進捗状況が書簡よりわかる。

〔大正一五年五月一五日〕

例の徴兵は番号が五十五番故入官せねば、ならないと役場で申候。依て入官延期の願書を出すには現在の在学証明書が入用に付御送付被下度。願書は当方で提出するから在学証明書が到着すれば直二手続き致候

〔大正一五年六月六日〕

先日送付致サレ候証明書早速町役場へ提出候處右証明書ニテハ出願出来申サズ候条一年志願兵願書ニ添属ノ為メノ証明書ヲ貰イ受ケ御送付相成度尚ホ中学校卒業ノ証明書必要ノ由ニ付当方ヨリ大村中学校ニ相談可致候条早稲田学校ノ証明書御送付有之度候一年志願兵願、一年志願兵入営延期願ハ当方ニ於テ認タメ大村連隊区司令官へ差出ス事ニ致居候ニ付承知相成度候

〔大正一五年六月一五日〕

本日一年志願兵願及ヒ入営延期願書を認め町役場迄提出致置候条本日認可書下付有之べく候ども入営延期願は毎年提出する事に候

父の奔走があり、陣内の一年志願兵と入営延期は認められた。延期手続きは毎年行なう必要があるため、在学中にも手続きを怠りなくするように注意を促し、卒業時にも手続きについて知らせていた。徴兵義務に反することは、町議に推薦されるような父にとっては、体面にかかわることであつたと思われる。

学費

次は学費と生活費の問題である。「学費は、父が貯へて居る丈は御前たちには、やるから、むだつかいさエ、せねば、宜しい」(三月二七日)と記しつつも、次便では「入費は成可く節約され度候 此頃は収入なき上に支出多く困り居候 光子も四月一日より入学致候」(四月二日)と記す。陣内家の子どもの教育に対する意識は高く、弟たちも中学校に在籍していたし、異母妹は後に高等女学校高等科まで進学して教員となっている。異母弟は旅順医学校に合格して、教育熱心であつたことは間違いない。⁽⁷⁾

陣内の東京遊学にかかる経費についての父の見積もりは、以下の通りであった。

間借賃が拾円と食費が四十五銭とすれば計式拾三円五十銭となる訳 是れ二小遣いを五円としても三十円以内で験約が出来る計算であるから三十円以内でまんが出来はせないか 又た服代、靴代、学校費等を支出すれば年計では六百円以上と相成五年間には三千円の経費を要する訳に付小生の今の生活にては少々大荷と考へ候

若し出来得るならば先々にては内職でも働き学費を加勢出来れば餘程結構なるも今直にとは、云はない 只だ参考まで申置き候 尚熟考を乞ふ

早稲田大学の学費は、陣内が在学した一九二六年度から三〇年度にかけて、高等学院が年に一二〇円、大学文学部は年に一四〇円であった。規則によれば、

高等学院

第一期 四月一五迄 五〇円 第二期 九月一五迄 四〇円 第三期 一月一五迄 三〇円

大学(文学部)

第一期 四月一五迄 五〇円 第二期 九月一五迄 五〇円 第三期 一月一五迄 四〇円

と記されていて、一年分を三期に分けて期限日までに分納しなければならず、「学費納付ノ期日ニ違フ者ハ本人及其保證人ニ催告シ尚納付セサル者ハ之ヲ除籍ス」とされていた。授業料は平均すれば毎月一〇円〜一二円程度、ほかに制服制帽などの負担が必要であった。

さて、父の当初の計算に対して、実際はどうであったのか。次の表は、後掲の資料に記されている送金額を一覧に

1928年	5月5日	40円	迫々送金に付ては困難致候 茲ニ金四拾円送金致候条落手相成度候
	6月25日	40円	申送りの通り茲に金四拾円為替にて送金致候条受領相成度候
	7月6日	20円	七月三日付書面正ニ受領致候 茲ニ金貳拾円也送金致候条受領有之度候 旅行中は健康を害せぬ様注意有之度候
	7月22日	32円	ズシよりは無事帰京致され候哉 別紙為替にて金參拾貳円也送金致候
	8月18日	15円	申送りの金拾五円漸く調達致候条送金致候
	9月1日	40円	茲ニ金四拾円送金致候…不得止農学校の裏門の畑二反歩餘り売却致候 實は毎月の学費其他入費の多き為め売却致候
	12月27日	40円	新年来ニ付き入費多き為め金四拾円送金致候条受領有之度候
1929年	3月19日	40円	本日金四拾円送金致ます 種々入費有之漸く調金出来候
	4月23日	75円	(6/26付書簡に記載)
	5月2日	50円	書籍代金五拾円送金致候条受領有之度
	5月25日	50円	茲ニ金五拾円送金ス 此レモ本日耕地整理組合ノ手当ヲ貰イ一円モ家費ニハ支イス送金致候
	6月22日	52円	六月十七日付にて早稲田大学より学費金五拾貳円催促来り候条本日別紙為替にて早稲田大学会計課宛に為替取組候条別紙為替券にて学校へ御差出被下度候
	6月26日		書面に依れば下宿料旅行費等で金七十円要求されたが本年四月からの送金は左記の通りと相成又タ七十円の金は到底送金出来兼る
	7月1日	35円	先日の答書は着きました 茲に金三拾五円送金致ます
	7月8日	15円	別紙為替金拾五円送金致候条(帰省旅費)
	10月21日	15円	手紙書ク閑モナク送金モ出来ズ漸ク茲ニ金十五円申越ノ通り送金致マス
	11月16日	15円	申送りの金拾五円送金します
	11月29日	15円	茲に金參拾五円送金致候条領収相成度候
	12月17日	15円	御正月の用意に金拾五円別紙送金候条受領有之度候
	12月28日	40円	本年は種々の物いりで年末は出費多く困り居候故金四拾円丈けで年越致され度候
	1930年	1月7日	
1月29日		50円	請求ノ金五十円丈本日送金ス
3月4日		96円	本月ハ学資金学校納メ四十一円下宿料其他四拾円旅費金拾五円計九拾六円ニテ米拾俵売却シテ幾分不足致候 何分緊縮時代ニ付万事節約致居候
5月13日		35円	此処に金參拾五円也送金致候
5月26日		40円	本日別紙小為替にて金四拾円也送金致しましたので御受取下さい
6月10日		20円	手の怪我は能くなくなったか心配して居ります 金廿円送金す 早々養生を頼む
6月28日		50円	茲に金五拾円送金致居候 早稲田大学よりも学費五拾貳円納金ノ旨申来り候も未タ納金出来ず困り居候
9月29日		60円	九月分四十円旅費貳拾円合計六拾円送金ス
1931年		1月29日	
	3月8日	金額不明	先日振替口座にて送金致候處到着致居哉
	3月23日	30円	学校納金は電報ノ翌日送金す 洋服代ハ參拾円丈一応送シ残金は暫く猶予すべし 米価下落の為め売り得ず 近き内には高価となる事と待居候 近來は収入なき為め少々借財を負い候

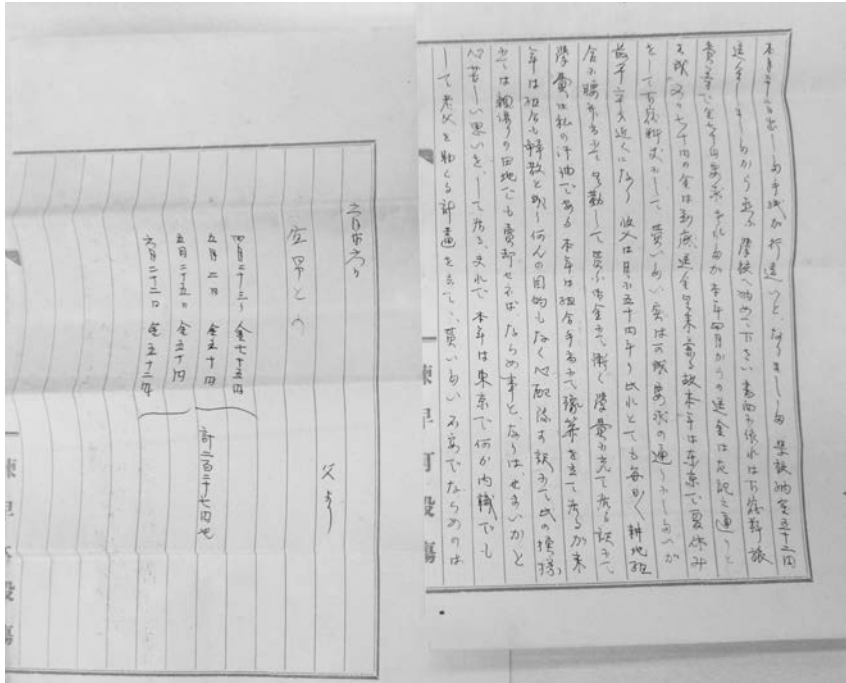
送金額一覧

1926年	4月11日	92円	(文中に記載の合計額)
	5月7日	35円	(5/15付書簡に記載)
	5月24日	金額不明	振替貯金ニテ本日送金致置候
	6月26日	35円	来月分の学費三十五円別紙小為替にて送金致候
	8月28日	35円	金參拾五円本日送金致候
	11月24日	35円	来月分学費三十五円丈ケ送金ス
	12月14日	10円	別紙之通り金拾円丈送付致候
	12月25日	40円	申越ノ通り金四拾円丈送金候条無事越年致サレ度候
1927年	1月30日	65円	別紙之通り金六拾五円丈送金致候
	4月14日	20円	書籍代として金貳拾円丈ケ送金します 残金は何日頃送金セバ宜しきや
	5月24日	92円	金五拾七円学校費 金三拾五円来月ノ食費 右別紙為替にて送金す
	6月8日	金額不明	本月二日諫早蘭販売購買利用組合に雇はれ昼夜勤務致居候 服代は遅く相成御困の事と存候 多忙の爲め漸く本日別紙為替にて送金致候
	6月28日	34円	先般より蘭市場へ雇はれ拾日斗勤務し町会其他多忙にて書面書く閑もなく活動致シ送金も遅延しました 為替の都合上本月は三拾四円送金致します
	7月14日	30円	盆祭其他二付多忙中通信略ス(金參拾円来る…宜男のメモ書きあり)
	9月18日	15円	茲ニ金拾五円丈送金するから請取なさい
		20円	(9月28日の書簡中に「本月は最早三十五円送金」と記されている)
	9月28日	15円	本月は最早三十五円送金済に付不用と思ふが茲に金拾五円丈ケ送金するから請取なさい 近來は不景気の上風水害と加はり貸家賃も皆無と相成生活に苦しく相成困難致す然し貴下の学費は可成値切せざる積り二付当分書籍等も教科書以外は可成購入を見合せ節約せられたし
	10月25日	35円	来月分の学費金三拾五円別紙為替券にて送金しますから請取なさい
	11月14日	20円	申越の通り金貳拾円送金致候 … 今は当方は稲刈の最中に候 稲は風水害の爲め検見(減米ノコト)を小作人より申出居候
	11月28日	40円	申送りの学費四十円送金致候
	12月13日	40円	第二キ分学費ハ本日事務所宛為替ヲ以テ納金致置候条通知致候 オーバー代ハ今暫ク猶予被下度尤モ代金ハ何程ナルヤ通知被下度候
12月22日	30円	オーバー代金參拾円丈送金致候 實は上等物が經濟なるも金策之都合參拾円送金致候	
1928年	2月25日	32円	申送りの通り金三十二円送金候条御請取被下度候
	2月28日	81円	茲に金四拾円送金致します 学費金四拾壹円ハ直接学校へ送金致しました
	3月8日	46円	送金が遅れて御困りの事と存候 實は結婚事件其他諫早町耕地整理組合事務を池松町長より囑託致され本月六日より町役場へ勤務致す事と相成り候 旁々にて取紛れ送金延引致候 茲ニ金四拾六円送金致候
	3月24日	50円	大学部へ上進の上は一層勉強せられ度候…茲ニ金五拾円送付候条 菌の治料費下宿料に致され度候
	4月11日	30円	四月六日付の手紙は正ニ受領しました 茲ニ金參拾円と戸籍抄本一枚送付しますから受取被下度 授業料其他は何日頃に送金すれば宜敷哉 調金の都合有之直ニ通知下さい
	4月20日	95円	申送りの通り金九十五円別紙為替券にて送金致候条受領有之度 大学の方は失念なく直ニ手續き致され度候

したものである。

一年目は特筆すべきこともなく、当初の見積もり金額よりも若干多い三五円程度が毎月送金されていたようである。二年目の一九二七年、父は繭市場で仕事を始め、さらに町議に選出されて多忙になると、送金が遅れることもあった。この年の諫早は「不景気の上風水害と加はり」、秋には「稲は風水害の為の検見（減米ノコト）を小作人より申出居候」状況にもなった。陣内家の貸家賃が皆無となるようなことも起きたが、父は「学費は可成値切せざる積り」と送金を続けた。陣内の一層の勉勵を期待し、「一日千週」の思いで卒業を待つとも伝えている。そして三年目の高等学院より大学部へ進学する段を迎えた一九二八年三月、父は「諫早町耕地整理組合事務を池松町長より囑託致され本月六日より町役場へ勤務する」機会を得る。この役場勤務は、陣内家の「財政」の助けとなった。父の書簡には「学費の差し次に今は毎日耕地整理組合へ出勤」とか「迫々送金については困難」「漸く調達」「畑二反歩餘り売却致候、実は毎月の学費其他入費多き為」などと負の言葉が織り交ぜられることが多くなるものの、前年よりも多い金額が送金されていたようである。ところが、四年目の一九二九年六月、父の「値切せざる積り」という気持ちにも限界がおとずれた。そもそも、父は陣内への仕送りを「小生の今の生活にては少々大荷」と思っただけでスタートしていたのである。

四年目の新学期を迎えた四月から五月にかけて、父は七五円・五〇円・五〇円の計一七五円の送金をしていた。二度目の五〇円は、耕地整理組合の手当を貰ったその日に「一円モ家費ニハ支イス送金」したという。そんな父の許へ、六月一七日付で早稲田大学より学費金五二円の催促が送られてきた。五日後、父は大学会計課宛に為替を組んで息子へ送ったが、入れ違いに今度は陣内から七〇円を要求する書面が届いたのである。この事態は、父の気持ちを逆なでし、息子を大学に送り出したことを後悔する、これまでにない厳しい言葉を並べたてた書簡を直ちに送った。



我慢の限界を伝える書簡（昭和4年6月26日）

最早六十才近くになり収入は月に五十円斗り
 此れとても毎日く耕地組合に腰弁当にて出
 勤して貰ふ御金にて漸く学費に充て居る訳に
 て学費は私の汗油である 本年は組合手当に
 て予算を立て居るが来年は組合も解散と成り
 何んの目的もなく心配致す訳にて此の模様
 ては親譲りの田地でも売却セねばならぬ事
 と、なりは、せまいかと心苦しい思い（中略）
 熟々く考るれば吾々中産階級の人民では大
 学二入學は考へ物と思ふ 世間を見渡せば人
 間は學問のみでは駄目である 活社会に出
 ては常識ある人が能く世涉りが上ずである事が
 目に付く故其積りで考へて貰いたい

この書簡を受け取った後の父子の具体的な
 やりとりを知る手がかりはない。が、残され
 た書簡からうかがえる限り、以後の送金額は
 小さくなつており、三〇年の一月には父の方
 から「是非金が入用ナレバ送ルが如何」と尋
 ねていることを考えると、陣内自身にも何ら

かの変化があったのかもしれない。

最上級の大学部三年となった一九三〇年から三一年になると、経済界はいつそう不景気となり、地方都市の諫早にも大きな不況の波が押し寄せた。父の観察によれば、旧暦の大晦日でも「例年ナレバ田舎ヨリ人多キ日ナルモ本年ハ不景気米安ク為メ二人出少ク町内モ淋シキ模様」、「諫早地方は米藪の産地なるに本年は価格大暴落の為め財界は火の消へたる有様」であった。⁹⁾ 陣内家にも当然、その影響は及び、米拾俵を売却して仕送りしたり、送金が遅れる、学費の督促が来ても直ぐには納金できなくなったりした。地主の財政にとって米価の下落が大きな打撃であったことがわかる。しかし、父は「後一ヶ年と相成候条田畑は売つても送金可致覚悟致居候」と何が何でも送金する気持ちを固める。数か月後に得られるであろう「大学出身としての子を持つ親の心」が、送金の原動力であった。

卒業と就職

陣内の卒業まで残り半年を切った一九三〇年一〇月、早慶野球戦の切符の配布の不公平が問題となったことを端に、学内で騒動が起こり、一〇月二一日の同盟休校にまで発展する事態となった。¹⁰⁾ この騒動は、連日の新聞報道となり、紛擾は泥沼化していくように報じられた。陣内の父もまた、新聞に「早稲田校生徒一万三千の同盟休業」と大書されたのを見て心配し、「如何の事あるも貴下は決して軽率の事はなきものと安心は致居るも矢張り親御心として不安」と、事態の詳細を知らせるように認める。

これまで、父は陣内の専攻する学問や大学の様子、都会の文化や生活について書簡のなかで言及したことはなかった。「お前のことだから大丈夫」という思いが恒常的であったが、この騒動に感じる不安だけは何としても伝えた

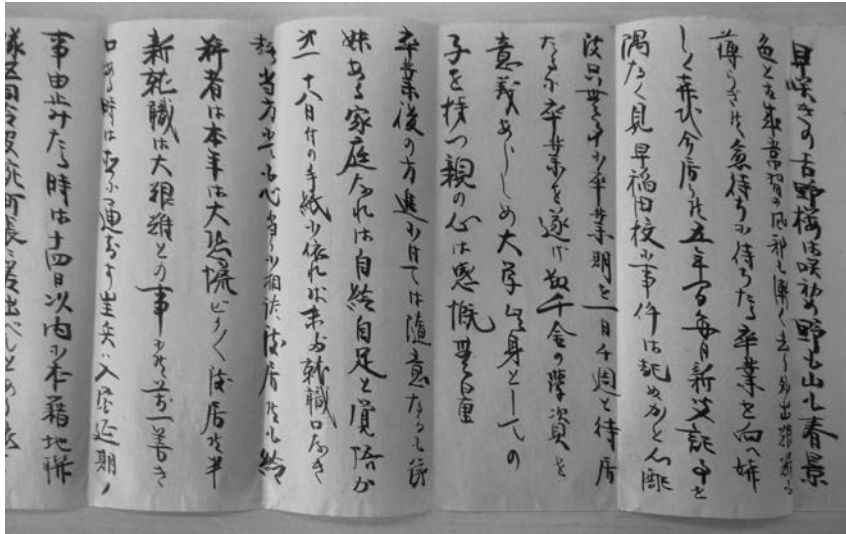


早稲田大学の騒動を伝える新聞（昭和6年政治経済学部卒業アルバムより転載）

かったのであろう。この期に及んで「卒業が水泡と化す」ことだけはしてほしくなかった。

他は置いて我々中産階級は毎月の学費としても汗と油で送金しつゝ、ある故最早後と四五ヶ月にて一生の榮譽を極むる時機と相成寝ても起きても後何月と夫れのミ老の身に樂み居候条決して、軽率の挙動に加盟しては出来ず 国家の爲め同志を善道に導き名を挙げ万事に卒業証書を頂く様神かけて祈り申候 下級の学生は前図瞭遠何と かつ始末も着く訳けなれど卒業間ぎわ上級生は一步を過まれば取返しのかかぬ羽目と相成生涯芽を出す事の出来ない不幸の人も数多有之 我々親子の苦心も水泡になる事を深く考へ善所せらるゝ事を幾重にも、御頼み申候

さらに父の心配に追い打ちをかけるように、新聞は大学生の就職難の状況を騒動と相前後して報道する。まさに「大学はでたけれど」の事態である。陣内も就職先を決定しないままに年を越し、一二月末より父への連絡もしていなかったようである。父は、そんな息子へ「好き就職口有之候哉 其后何たる通知も存く心配致居候 新聞紙上にも餘程就職難の如く見受け候条委細御知らせ被下度候」と伝える。それでもなお連絡のない息子へ今度は



卒業を喜ぶ書簡（昭和6年3月23日）

「病氣にては無之候哉 心配致居候 愈々来月は卒業の事と考へ居候處如何に候哉 別儀故障等は無之候哉」と心配を記す。父の頭が「卒業」のことについてはいっぱいであったことが想像できる。就職が決まっていなくてもまた心配で、父もまた地元で「心当りに相談致」したり、「弟妹ある家庭なれば自給自足と覚悟か」と伝えたりはしていた。しかし「大恐慌」の最中、就職は大困難と認識しているようである。立てるような言葉はない。父にとっては、まずは五年間に届けた「数千金の学資を意義あらしめ大学出身としての子を持つ親の心」にたどり着くことがすべてであった。

おわりに

陣内は一九三一年四月三日、無事に文学部文学科国文学専攻を卒業する日を迎えた。この年の早稲田大学文学部卒業生は一、〇七五名である。¹¹ 結局、陣内は就職せず、中国に渡って勉強する道を選び、一九三一年六月から半年余り、再び父の仕送りに支えられて北京で生活した。帰国

後、兵役についた後に母校へ就職し、ようやく給与生活者となることができた。

書簡から判明するだけの金額でも二、〇〇〇円をはるかに超える費用が、陣内に投じられている。入学当初に父が見積もった合計金額三、〇〇〇円と重なる。昭和初期の小学校教員の初任給が五〇円前後、銀行員の初任給が七〇円¹²⁾であることと比較すると、その金額の大きさがわかる。恐慌下の厳しい経済状況のなかで、我が身の老いを感じながらも俸給生活者となつて働き、土地などを売却して学資を送り続けた父。「汗と油で送金」「親子の苦心」「可成値切らぬよう覚悟」と父親自身が何度も表現しているように、息子を遊学させることは、決して生易しいことではなく、相当な覚悟を必要とする事態であることを書簡は物語っている。

註

頁三七六頁参照。

- (1) その他の書簡の中には、中国文学者・文芸評論家の竹内好発信(昭和一八年八月一日推定)の書簡が一通ある。文面から、親しい関係にあったことがわかる。竹内は中国文学研究会の解散について「ただ／＼申訳ないことに思つてゐます。しかし会が解散してから急に支那問題を寄り文化問題として考へる傾向に一般に起つてきたやうに考へられ吾々は十年先に歩いてゐたのだといふ氣がします」と記している。
- (2) 昭和一七年六月二一日 富美子宛陣内宜男発信書簡に記されている。
- (3) 『早稲田大学百年史 第三巻』(一九八七年三月) 三六七
- (4) 「本年度定年退職 陣内宜男教授略歴・業績」(『早稲田大学教育学部学術研究 地理学・歴史学・社会科学編』25 一九七六年)
- (5) 陣内宜男「昭和初頭の国文科」(早稲田大学国文学会『国文学研究』7 一九五二年一〇月)
- (6) 陣内宜男「創刊の頃のこぼれ話」(早稲田大学国文学会『国文学研究』51 一九七三年一〇月)
- (7) 昭和一八年四月九日の陣内宜男が妻に宛てた書簡に異母弟が医専に合格したことや浪人せずにすんで安心したことなどが記されている。
- (8) 大正十四年九月改正から昭和五年四月改正までの各年の

『早稲田大学学則』を参照。

(9) 本書簡は長崎県諫早町という一地方都市の恐慌下の経済や社会、農作業の様子を伝える資料群としても意義がある。

(10) 前掲『早稲田大学百年史 第三卷』四五六頁～四八一頁参照。

(11) 『早稲田学報』第434号 昭和六年四月一〇日 一三頁参照。

(12) 『値段の風俗史』続(一九八一年 朝日新聞社)一九頁・『値段の風俗史』続続(一九八二年 朝日新聞社)六九頁参照。

資料翻刻（抄出）

○凡例

- 一、ここに翻刻掲載する書簡はすべて、当該期に陣内多三から陣内宜男に送られたものである。
- 一、書簡は時系列で配列した。年月日は、書簡に記された年月日とし、不明の場合は消印の年月日を記した。書簡の内容上、ここに紹介をしていない書簡も若干ある。
- 一、書簡には個人情報等に関わる記述もあるため、陣内宜男の早稲田大学在学に関わる箇所のみを抄出、紹介した。
- 一、文書中の前後を省略した箇所が多々ある。途中を略した箇所のみ（中略）と記した。
- 一、書簡を翻刻するにあたり、文章と文章の切れ目と思われる箇所を一字あげとした。
- 一、明らかに誤字と思われる箇所を含めて、原文通りの翻刻とした。判読不明の文字については字数分の■で表記した。

・大正15年3月27日

学費は申送りの通り電報為替にて送金した

試験の結果は一生懸命勉強しても入学の出来ぬのは是れ運命 又人の富貴も同様一生の運命 それで入学の出来ぬか

らとて、くやむにも、及はぬ、学費は、父が貯へて居る丈はお前たちに、やるから、むだに、つかいさエ、せねば、宜しい

東京に行くならば、徴兵検査には是非間にあうように帰宅する事

・大正15年4月2日

二十九日出の書状正に落手致候 安着の由安心致候 此度と云ふ此度は是非入学の出来る様致され度候 着物書物は

■二請取候

徴兵検査二帰る旅費は牛込区役所にて請取る様町役場二行き依頼致可く候条区役所にて請取る事 学校の成績発表は何日頃なるや何日頃帰宅するや御通知有之度 入費は成可く節約され度候 此頃は収入なき上に支出多く困り居候

・大正15年4月11日

金三拾円は本月振替貯金で送金致したから三四日は延着するから昨日今日当りは郵便局より送達の事と思ふ それて手紙とは別になつて居る 振替番号は二〇七八六番 此度は至急用の趣きに付為替にて同封送金したから受取りなき
い 金六拾貳円

・大正15年5月1日

四月二十九日夜付の端書正ニ受領致候 無事着京の趣安心致候 定めし二十六日より出校の事と存候
 例の徴兵の結果は別紙番号の通り若番なる故入営する事覚悟を要し候 多分本年十月頃愈々確定と相成る訳に付其節
 入営延期の手續可致候 先便諫早新聞参考の爲め送付致置候

・大正15年5月15日

五月七日付て郵便局から送金済の通知があつたが三十五円は入手致され候哉
 間借賃が拾円と食費が四十五銭とすれば計金貳拾三元五十銭となる訳 是れ二小遣いを五円としても三十円以内で
 約が出来る計算であるから三十円以内でがまんが出来はせないか 又た服代、靴代、学校費等を支出すれば年計では
 六百円以上と相成五年間には三千円の経費を要する訳に付小生の今の生活にては少々大荷と考へ候
 若し出来得るならば先々にては内職でも働き学費を加勢出来れば餘程結構なるも今直にとは、云はない 只だ参考ま
 で申置き候 尚熟考を乞ふ

(中略)

例の徴兵は番号が五十五番故入営せねば、ならないと役場で申候 依て入営延期の願書を出すには現在の在学証明書
 が入用に付御送付被下度 願書は当方で提出するから在学証明書が到着すれば直ニ其手続き致候

・大正15年5月24日

振替貯金ニテ本日送金致置候

在学証明書ハ至急御送付相求度候

保養第一に勉強致さレ度候

・大正15年6月6日

先日送付致サレ候証明書早速町役場へ提出候處右証明書ニテハ出願出来申サズ候条。一年志願兵願書ニ添属ノ為メノ証明書ヲ貰イ受ケ御送付相成度。尚ホ外ニ中学校卒業ノ証明書必要ノ由ニ付当方ヨリ大村中学校ニ相談可致候条早稲田学校ノ証明書御送付有之度候

一年志願兵願、一年志願兵入営延期願ハ当方ニ於テ認タメ大村連隊区司令官へ差出ス事ニ致居候ニ付承知相成度候

・大正15年6月15日

六月十二日付の手紙到着。本日一年志願兵願及ヒ入営延期願書を認め町役場迄提出致置候条本日認可証下付有之べく候ども入営延期願は毎年提出する事に候

・大正15年6月26日

来月分の学費三十五円別紙小為替にて送金致候

・大正15年8月28日

金参拾五円本日送金致候条受領相成度候

・大正15年11月24日

来月分学費三十五円丈ケ送金ス

ジャケツハ今母上ガ毎晩アミ居ルカラ出来上リ次第送付ス 昼ハ毎日購買会ノ集金ニ出テ行クカラアミ方ガオクル、
然シ大分アミテアルカラ長クハ掛ルマイ

・大正15年12月14日

別紙之通り金拾円丈送付致候条受領有之度候 例に依り自宅は此度正月は致候条餅は送付可致候

・昭和元年12月25日

申越ノ通り金四拾円丈送金候条無事越年致サレ度候 本年ハ天氣悪シキ為メモチ米出来ズ一月ノ間ニ合イ兼候条旧正月二年越シ致ス考ヘ二候

・昭和2年1月30日

別紙之通り金六拾五円丈送金致候条受領被下候 旧年末にて忙はしくあす餅搗ことに致居候

・昭和2年4月14日

四月十日の手紙は着きました 書籍代として金貳拾円丈け送金します 残金は何日頃送金せば宜しきや

・昭和2年5月24日

金五拾七円 学校費 金三拾五円 来月ノ食費

右別紙為替にて送金す

・昭和2年6月8日

多忙の為め漸く本日別紙為替にて送金致候条受取被下度 只今は繭の出盛りにて毎日七八千貫の買売出来居候

・昭和2年6月28日

先般より繭市場へ雇はれ拾日斗勤務し町会其他多忙にて書面書く閑もなく活動致し送金も遅延しました 為替の都合
上本月は三拾四円送金致します

・昭和2年7月14日

〔金参拾円来る〕

・昭和2年9月18日

茲ニ金拾五円丈送金するから請取なさい

・昭和2年9月28日

本月は最早三十五円送金済に付不用と思ふが茲に金拾五円丈け送金するから請取なさい
 近来は不景気の上風水害と加はり貸家賃も皆無と相成生活に苦しく相成困難致す 然し貴下の学費は可成値切せざる
 積り二付当分書籍等も教科書以外は可成購入を見合せ節約せられたし

・昭和2年10月25日

来月分の学費金参拾五円別紙為替券にて送金しますから請取なさい

(中略)

本年は小野村森山村長田村等の大被害で且つ一聯の暴風被害で諫早は近年にない不景気となりました

・昭和2年11月14日

申越の通り金式拾円送金致候条落手相成度候

(中略)

雨傘は送料傘代と餘り変らないから、あとで、運送問屋へ聞合せた上で送る事ニ致べく候

オーバーは代金は其内ニ送金致べく候

今は当方は稲刈の最中ニ候

稲は風水害の為の検見（減米ノコト）を小作人より申出居候

・昭和2年11月28日

申送りの学費四十円送金致候

健康を第一とし勉強の程神かけて祈上候

卒業の日を一日千週と相待申候

・昭和2年12月13日

毎日健康勉強の趣安心致候 第二キ分学費ハ本日事務所宛為替ヲ以テ納金致置候条通知致候 オーバー代ハ今暫ク猶

予被下度 尤モ代金ハ何程ナルヤ通知被下度候

・昭和2年12月22日

オーバー代金參拾円丈送金致候 實は上等物が経済なるも金策之都合參拾円送金致候 来年四月よりは独学の教員か

又は家庭教師かあ務め幾分の学資を補佐する事ニ相成れば老の身に心配を少して幸ニ有之候

然し無理には進めず委細の事は伯父興三と協議せらるべく候 健康を第一ニ祈候

・昭和3年2月25日

二月二十一日発送の書状正ニ落手仕候 申送りの通り金三十二円送金候条御請取被下度候

・昭和3年2月28日

試験は未ダ済ませんか 身体を害せぬ様に勉強を願います

茲に金四拾円送金致します

学費金四拾壹円ハ直接学校へ送金致しました 先日より衆議員選挙で世間ハさはぎましたが今は全く大風の後の様な気がします 私ハ忌中に付関係しませんでした

・昭和3年3月8日

送金が遅れて御困りの事と存候 実は結婚事件其他諫早町耕地整理組合事務を池松町長より囑託致され本月六日より町役場へ勤務致す事と相成候 旁々にて取紛れ送金延引致候 茲に金四拾六円送金致候条御受取被下度候

・昭和3年3月24日

試験の事は御前の事故必ず上成蹟の事と予て安心致居候 漸く大学部へ上進の上は一層勉強せられ度候 只夕卒業の

日を一日千週と神かけて待居候 財政の爲め再度俸給生活を致候 然し身体は老いて益々健康に付安心被下度候 茲
ニ金五拾円送付候条菌の治療費下宿料に致され度候

・昭和3年4月11日

学費の差し次ぎに今は毎日耕地整理組合へ出勤致居ります 然し此頃は持病の胃病も平癒しジが時々痛むのみなるも
大した事もなく無事に過ごし居ります

四月六日付の手紙は正に受領しました 茲に金参拾円と戸籍抄本一枚送付しますから受取被下度 授業料其他は何日
頃に送金すれば宜敷哉 調金の都合有之直ニ通知下さい

・昭和3年4月20日

申送りの通り金九十五円別紙為替券にて送金致候条受領有之度 大学の方は失念なく直ニ手続致され度候

・昭和3年5月2日

先日送金致置候処到着致候哉 未ダ請取の通知なき故心配致居候

・昭和3年5月5日

追々送金に付ては困難致候 茲ニ金四拾円送金致候条落手相成度候（中略）一日も早く卒業の期を朝晩祈り居候

・昭和3年6月25日

本年は至つて天気廻り宜敷き為め定めし豊年ならんと悦び居候 麦作も上出来繭もかなり上作の趣きに候 然し世間は未ダ不景氣に候 申送りの通り茲に金四拾円為替にて送金致候条受領相成度候

・昭和3年7月6日

七月三日付書面正に受領致候 茲ニ金貳拾円也送金致候条受領有之度候
旅行中は健康を害せぬ様注意有之度候

・昭和3年7月22日

ズシよりは無事帰京致され候哉 別紙為替にて金參拾貳円也送金致候 ユカタは別便小包にて二枚丈ケ送付致候条到着落手相成度候

本年も徴兵入営延期願に必要に付折返シ在学証明書御送付相成度候 最早期限接近致居候条失念なく送付有之度也

・昭和3年8月18日

申送りの金拾五円漸く調達致候条送金致候
日々耕地整理組合事務所（諫早町役場）へ出勤致居候

・昭和3年9月1日

茲に金四拾円丈送金致候

就而ハ（中略）不得止農学校の浦門の畑二反歩餘り売却致候 實は毎月の学費其他入費多き為め売却致候 尤も割合の善き田地其ノ内には買入るゝ積りに候

・昭和3年12月27日

新年来ニ付き入費多き為め金四拾円丈送金致候条受領有之度候

・昭和4年3月19日

本日金四拾円丈送金致します 種々入費有之漸く調金出来候 委細は帰宅面会の上

・昭和4年5月2日

書籍代金五拾円送金致候条受領有之度昨今は余程凌き能く相成候

・昭和4年5月25日

茲ニ金五拾円丈送金ス 此レモ本日耕地整理組合ノ手当ヲ貰イ一円モ家費ニハ支イス送金致候

・昭和4年6月22日

六月十七日付にて早稲田大学より学費金五拾貳円催促来り候条本日別紙為替にて早稲田大学会計課宛に為替取組候条別紙為替券にて学校へ御差出被下度候

・昭和4年6月26日

本月二十二日出した手紙が行違いとなりました 学校納金五十二円送金しましたから直に学校へ納めて下さい 書面に依れば下宿料旅費等で金七十円要求されたが本年四月からの送金は左記之通りと相成又々七十円の金は到底送金出来兼ねる故本年は東京で夏休みをして下宿料丈にして貰いたい 実は可成要求の通りにしたいが最早六十才近くになり収入は月に五十円斗り此れとても毎日〳〵耕地組合に腰弁当にて出勤して貰ふ御金にて漸く学費に充て居る訳にて学

費は私の汗油である 本年は組合手当にて予算を立て居るが来年は組合も解散と成り何んの目的もなく心配致す訳にて此の模様にては親譲りの田地でも売却セねばならぬ事と、なりは、せまいかと心苦しい思いを、して居る、夫れで本年は東京で何か内職でもして老父を助くる計画を立て、、貰いたい 不安でならぬのは二名の子供が居る故心配で死んでも目が閉られぬ 熟々／＼考るれば吾々中産階級の人民では大学二入学は考へ物と思ふ 世間を見渡せば人間は学問のみでは駄目である 活社会に出ては常識ある人が能く世渉りが上ずである事が目に付く故其積りで考へて貰いたい

(中略)

四月二十三日 金七十五円

五月二日 金五十円

五月二十五日 金五十円

六月二十二日 金五十二円

計 二百二十七円也

・昭和4年7月1日

先日の答書は着きました

茲に金三拾五円丈送金致します

・昭和4年7月8日

別紙為替金拾五円送金致候条（帰省旅費）受領有之度 先日六月分学費トシテ金卅五円小為替（二十円券十五円券二枚）送付致候処受領致され候哉
何日頃帰宅スルや通知有之度候

・昭和4年10月21日

右講会の問題デ昼夜苦シミ手紙書ク閑モナク送金モ出来ス 漸ク茲ニ金十五円申越ノ通り送金致マス

・昭和4年11月16日

兎角人間は病氣程不愉快なものはなく健康でなければ何事も出来ません 健康で来る一年後の卒業を神仏に祈つて居ります（中略）申送りの金拾五円送金します

・昭和4年11月29日

茲に金参拾五円送金致候条領収相成度候 迎て新年も近き小遣も入用と存候も次会の時は何んとか致べく前陳の通り戦争中に付御諒承を乞ふ

・昭和4年12月17日

御正月の用意に金拾五円別紙送金致条受領有之度候

・昭和4年12月28日

本年は種々の物いりで年末は出費多く困り居候故金四拾円丈けで年越致され度候

・昭和5年1月7日

本年一年で貴下ノ卒業ヲ一日千週ト待ツ

ハノイタミハ如何ニナリマシタカ 大シタ事モナイダロウト餘リ氣ニモカケズニイタガヨクナリマシタカ
是非金が入用ナレバ送ルガ如何

・昭和5年1月29日

今日ハ旧曆ノ大晦日ニテ天気快晴ニ付例年ナレバ田舎ヨリ人出多キ日ナルモ本年ハ不景氣米安ク為メ二人出少ク町内
モ淋シキ模様

請求ノ金五十円丈本日送金ス

・昭和5年3月4日

帰省旅費トシテ金拾五円送金致候

本月ハ学資金学校納メ四十一円下宿料其他四拾円旅費金拾五円計九拾六円ニテ米拾俵売却シテ幾分不足致候 何分緊縮時代ニ付万事節約致居候

・昭和5年5月13日

無事勉強致され候哉 病気に犯されざる様祈り居候 此の頃は年老いてか楽しみ薄く只東の空を向いて安否を思うのみ 送金が遅延して気の毒に候 此処に金参拾五円也送金致候(中略) 実は後一ヶ年と相成候条田畑は売ても送金可
致覚悟致居候

・昭和5年5月26日

本日別紙小為替にて金四拾円也送金致しましたので御受取下さい

・昭和5年6月10日

手の怪我は能くなつたか心配して居ります 金廿円送金す 早々養生を頼む

・昭和5年6月28日

茲に金五拾円送金致候 早稲田大学よりも学費五拾貳円納金ノ旨申来り候も未夕納金出来ず困り居候

・昭和5年9月29日

九月分四十円旅費貳十円合計六拾円送金ス 東北地方ハ最早寒冷ノ事ト思ハレ候条病氣ニ犯サレヌ様十分注意有之度
(中略) 不景氣ノ為メ米ガ安イノニ困リ居候

・昭和5年10月25日

此節の各新聞には早稲田校生徒一万三千の同盟休業と大書致候處如何の模様なるや心配致居候条詳細御通知有之度
如何の事あるも貴下は決して軽率の事はなきものと安心は致居るも矢張り親心として不安を感し申候
他は置いて我々中産階級は毎月の学費としても汗と油で送金しツ、ある故最早後と四五ヶ月にて一生の榮譽を極むる
時機と相成寝ても起きても後何月と夫れのミ老の身に樂み居候条決して、軽率の挙動に加盟しては出来ず 国家の

為め同志を善道に導き名を挙げ万事に卒業証書を頂く様神かけて祈り申候 下級の学生は前図瞭遠何とか后始末も着く訳けなれど卒業間ぎわ上級生は一步を過まれば取返し付かぬ羽目と相成生涯芽を出す事の出来ない不幸の人も数多有之 我々親子の苦心も水泡になる事を深く考へ善所せらるゝ事を幾重にも御頼み申候

・昭和6年1月18日

就而は来る二月は愈卒業の事と存候処好き就職口有之候哉 其后何んたる通知も存く心配致居候 新聞紙上にも餘程就職難の如く見受け候条委細御知せ被下度候

世界中の不景気に供ない当地も大不景気にて特に諫早地方は米蘭の産地なるに本年は価格大暴落の為め財界は火の消へたる有様に候

(中略)

然し来月より学費が減ずる事故幾分楽み居り候 兎角老年の故なるや病気に犯され易く困り申候

・昭和6年1月29日

先月末通知後音信無之病気にては無之候哉 心配致居候 愈々来月は卒業の事と考へ候處如何に候哉 別儀故障等は無之候哉 送金の繰合も有之候条至急何らの義御通知相成度候

・昭和6年3月8日

試験は相済候哉 心配致居候条終了次第通知有之度候 先日振替口座にて送金致候處到着致候哉 卒業後の方進は如何相定り候哉 詳細返事被下度候

・昭和6年3月23日

愈待ちに待ちたる卒業を向へ嬉しく喜び合居り候 五年間毎日新聞記事を隈なく見早稲田校に事件は起ぬかと心配致只無事に卒業期を一日千週と待居たるに卒業を遂げ数千金の学資を意義あらしめ大学出身としての子を持つ親の心は感慨無量

卒業後の方進に付ては随意なるも弟妹ある家庭なれば自給自足と覚悟か 第一十八日付の手紙に依れば未だ就職口なき趣当方にも心当りに相談致居候も給料者は本年は大恐慌ビク／＼致居候半新就職は大困難との事に候 萬一善き口ある時は直に通知す 徴兵ハ入営延期ノ事由止みたる時は十四日以内に本籍地連隊区司令官宛町長ニ差出べしとあり依て十五日事故止として明日役場へ届る積りニ付通知す 学校納金は電報ノ翌日送金す 洋服代ハ參拾円丈一応送金シ残金は暫く猶予すべし 米価下落の爲め売り得ず 近き内には高価となる事と待居候 近來は収入なき爲め少々借財を負い候

(中略)

三月二十一日付手紙右書終りと同時に受取候 前書之通り方行は随意支那行も賛成 行くにすれば種々仕度もある訳なれば東京を引上げ一応帰宅の上篤と協議致べく木下さん川口さんに宜敷